

源氏物語の
こころ

重松信弘



源氏物語

江苏工业学院图书馆

藏书章

重松信弘

佼成出版社

源氏物語のこころ

平成二年五月二十日 初版第一刷発行

著者 重松信弘

発行者 竹村欣三

発行所 株式会社佼成出版社

〒一六六 東京都杉並区和田二一七一

電話(〇三)五三八五―三二七(出版部)

(〇三)五三八五―三三三(営業部) 振替東京七七一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Nobuhiro Shigematsu 1990 Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

ISBN4-333-01480-8 C1095

はしがき

私は平素、源氏物語を読むことが多く、私なりにこの物語の心について考えるところがあるので、それを述べようと思う。それも今まで書いた論文や著書のように、多くの文献を引用して実証したり、論考したりすることはせず、また人々の説を広く参照することもせず、考える所を端的に、自由に述べることにする。

かつて本居宣長は源氏物語の心理描写を絶賛して、「やまと・もろこし・いにしへ・今・行くさきさきにも、たぐふべきふみはあらじとぞ覚ゆる」と書いたが、彼の見解によれば物のあわれが文芸的感動のすべてであり、源氏物語にそれが最もよく表れているという。物のあわれは平安時代の文芸的情趣の主潮ではあっても、もちろんそれがすべてではない。それにしても主潮だけを豊かに、強く、深く描いたという点に、この物語の心の特徴がある。その心は優雅に、複雑に動き、また繊弱・微妙に動き、一口にいえば多分に女性的であり、万葉集にみるようなますらおぶりの心ではなく、軍記物にみる豪勇悲壮な心でもない。また中世の文芸にみる幽玄枯淡の味に乏しく、近世俳諧にみるわび・さびの趣もほとんどない。

また物のあわれの心は優雅・繊弱・微妙であつても、俗をはなれた世外の文雅風流に遊ぶ心で

はなく、生々しい人間臭さがつきまとうており、その点では万葉の心と通ずる。軍記物は傍観者が書いた文芸であり、幽玄枯淡は一部隠遁者いんとんしゃの文芸であり、わび・さびも風流・風雅を世外のこととして楽しむ市井の風流人の文芸であって、現実生活の心の文芸ではないが、この物語の「あわれ」は現実の生活に密着している。紫式部はこの物語を傍観者として描かず、世外の隠遁者、市井の風流人のように、物語を现实生活の外に遊ぶ心で創ってはいない。この物語は作者の生活の実感で描かれており、往々にして創作の中に自分を打ち込む心があり、これがこの物語の感動を深くしている。花鳥風月のあわれや、歌舞・音楽・文芸・書画のあわれは、己を空しく描いているようではあっても、それには式部の美に対する強い追求の心が宿っている。

若い男女の愛情はそれが好色の遊びである限り、面白い物語というほかに、格別の意味はないようであるが、それで男はよいとしても、女は必ずといってよいほど心を痛めており、そこに作者の嗟歎さななの心が宿っている。特に男との関係が生涯の生きてゆく道にかかわる問題となる時、女にとっては真剣な問題となり、しばしば深刻な思いとなり、深いあわれの感動がকাশし出されている。このあわれには女にはなほだしく不公正であった当代の男女関係をふまえて、女の生きてゆく道について深く思念し、宿世の拙さを深く嗟歎した式部の心が宿っている。

源氏物語にこのような生々しい人間的気臭きゆうがあるのは、式部が当代の美的主情主義の時代精神に生きているためである。この時代精神に生きる限り、ひたすら美的充足を求めるのであり、求め得ては喜び、妨げられては歎き悲しみ、苦しくなつては仏道に逃避するという生き方のほかに、

生きる道はない。この基調的心情があるため、たとえ仏道に逃避したとしてもその心情が跡を引いて、その心は何となく淋しくて、枯淡に澄まず、西行・兼好・宗祇・芭蕉のような文雅風流を樂しむゆとりも、安らぎも生まれない。真に隱遁風雅を喜ぶ静寂枯淡な心は、文芸の心の内面に仏教が深く浸透して、文芸と仏教とが内面的に融和したあとに可能となる。それは中世の時代精神の基盤の上に生まれ、またはそれを通過したのちに生まれる。この物語は時代精神の基調のため、美的感動がいつでも主情的主体に密着しており、一部の中世文芸のように、それを観念的・思念的に昇華することができず、人間的氣臭から抜けられない文芸となったのである。それだけに人の心が生のままに出ていて、人の心を打つものがある。

ところで研究には、物語の外側から研究するものと、物語そのものを対象として研究するものがある。外側とは、例えば、この物語の作者、作られた時代、作られた事情とその時期、種々の伝本、研究の発達などを研究するもので、直接には物語を研究しない。物語そのものを対象とする研究は、大きく分けると、表現形象と意味内容との研究になる。前者は例えば、この物語の文章・文体、修辭法、叙事・抒情の方法、物語の構造とその展開というような、表現形象の方面の研究である。後者は例えば、男女間の愛情の心理、芸術・芸能や自然を觀照する心、仏教の教理を思ふ心、種々の事件や人間關係における人々の心情や、そのことの意味などを考察するものである。物のあわれや種々の思想・評論も、人の心の問題であるからこの研究に入る。

表現と意味とは同じものの両面であつて、表現は形、意味は心である。両者は表裏一体で分か

れて存在することはできない。しかし創作の心理からいえば、作者に発表したい心があつて、それを表現で発現さすのだから、心が根本である。その発表したい心も、表現を得なければ、発現されず、また表現の善し悪しで、心も善くも悪くもなるので、作品の上では形と心とは一体不離となつてゐる。

一体とはなつていても、形と心というように性質が違つてゐるから、研究する場合には前に述べたように、それぞれ違った方面から文芸的意義を究明することになる。それで同じ文章に対しても、表現形象の面からはその技法を考え、意味の上からはその心を考えることになる。それは短い語句・和歌などから、長大な事件・事象に及んでも同じである。例えば、雨夜の品定めについて表現の面からみると、とうのちゆうじやう ひだりのうまのかみ頭中将や左馬頭などの四人の男の巧妙な配役があり、全体に序論・本論・余論という構想があり、それらの内部がまた細かく分けられ、さらにそれらには巧みな文章技法がある。心の面からみると、多くの個性の違う女が提示されて、鋭く観察され批判されている。批判の原理として、「物まめやかに静かなる心のおもむき」でなければならぬということが、形を変えて反覆して説かれてゐる。かくして表現の上からも心の上からも、文芸的意義が考えられる。

本稿では心の面から源氏物語の文芸的意義を考えることを目的とするが、その心を考える場合、表現を考えねばならないことが少くない。例えば、桐壺帝の更衣を亡くした悲しい心は、長恨歌の辞句を巧みに援用した表現技法と共に考えられ、某院で夕顔を死なして、悲しみに恐れる源氏

の心は、その場の気味悪いすぐれた情景描写と共に考えられる。しかしまた源氏が藤壺に引かれる心とか、女三宮の降嫁で紫上が悩む心などは、ある特別な表現を考える必要はほとんどなく、物語に流れている心情そのものを、深く考えるべきである。この物語の心の探究には、以上のように、表現も合せ考えるべき場合と、それがあまり必要でない場合とがある。

なお心と関連のある主題ということについて考えておく。主題も心であるが、それはあるまとまった部分とか、物語全体というような広範なものに通ずる心である。心は主題が意味するものだけではなく、前に表現と対照させてあげたような、さまざまなものがある。あまり小部分の心は主題とはいわず、せいぜい各巻とか、各部とかにわたるものを指し、またこの物語全体にわたるものを指す。要するに、主題は大きく統括する心であり、心は大小の事件・事象とか、場面とか、人々の言行・思想・心情などにわたってさまざまである。

私としては珍らしくわずらわしい学問的桎梏から解放された気持ちで本書を書くが、だからといって、恣意には流れないつもりである。ただどれだけこの物語の心を正しく、深く、究明することができるか、私には分からないが、皆さんの御感想・御批判を得たいと思っている。

目次

はしがき 1

一、紫式部と源氏物語 11

宮仕え以前 13

生い立ち／結婚生活／寡居生活

宮仕え生活 21

日記のモチーフ／善美の世界／人間関係／違和感

源氏物語の著作 32

執筆時期／物語完結の証拠／物語の母胎／紫式部の資質

二、四部からなる源氏物語 47

五十四巻をどう区分するか 49

物語の意味／四部の物語と主題

源氏青年期の物語 53

桐壺巻の意義／源氏のすき心と雨夜の品定め／得意時代の源氏と女の心／

源氏の失意時代／須磨と明石

源氏中年期の物語 66

第二部の特色と区分／第一部女性の後日談／子女中心の物語／栄光の物語

源氏晩年期の物語 75

第三部の区分とその特色／女三宮の降嫁事件／密通事件／後日談／源氏と紫上との終末

八宮父子の物語 83

第四部の特色／大君中心の物語／中君中心の物語／浮舟中心の物語／

紫式部の投影／結び

三、登場人物の心理描写 95

心と心理 97

人間の心理と分析／心理における主流と傍流

あわれの心理の動向 100

複雑な心理／微妙な心理／繊弱な心理

あわれの心理の内容 107

恋情の心理／温情の心理／観照の心理

非あわれ的心理 125

反あわれ的心理／没あわれ的心理／対あわれ的心理／超あわれ的心理

四、種々な人間像 135

二つの基本的心理 137

人間像の分類／あわれ的心理／非あわれ的心理

源氏の人間像 140

源氏のすき心／源氏の教養／源氏の道心／源氏の人間性

頭中将と薫の場合 159

頭中将の人間像／薫のすき心／薫の道心

主要な女性たち 172

紫上の人間像／明石上の人間像／玉鬘の人間像／大君の人間像／浮舟の人間像

五、自然と人間 195

源氏物語の自然の特色 197

物語的自然／自然観の独自性／万葉との比較

三種のあわれ的自然 201

主観的自然／客観的自然／主客融合の自然

非あわれ的自然 221

背景の自然／場面の効果

六、源氏物語の種々な問題——結びに代えて——

227

文芸的意義について 229

座談会の記事／研究より読むこと／頽落と夕霧の教育

作者の問題 235

作者と宇治十帖／「原源氏」の問題／帚木三帖の問題

紫式部のこと 241

宮仕えの問題／式部の体質／紫式部と孝標女

装幀 安彦勝博

一、紫式部と源氏物語

宮仕え以前

生い立ち

源氏物語の心について考察する前に、まず紫式部について、そして式部が源氏物語を書いたことについて、私の考えを述べる。紫式部の経歴や人となりを知る資料ははなはだ少く、その生死の年月も定かでない。著作には源氏物語のほかに、紫式部日記と家集の紫式部集とがある。源氏物語は作り物語でフィクションがあるから、直接的に式部その人を語るものではない。日記は彼女を知る上に、最もよい資料であるが、宮仕え生活の一部分にすぎない。家集には娘時代から宮仕えの終わりのころまでの、十七、八年間の歌が集められているが、百二十首前後で（伝本によって歌数が違う）贈答歌もあるので、式部自身の歌は百首にも足りない。その上に和歌は抒情的であり抽象的であるため、具体的なことは分からない。式部の三種の書からは、具体的な経歴はあまり分からないが、その人物・思想・心情などはかなり知られる。

式部の父^{ためとき}為時は政府に仕えた役人で、越前守・越後守を歴任しており、その経歴・事蹟は式部よりはよく分かっている。紫式部が「式部」と呼ばれたのは、為時が式部^{しきぶのじょう}丞・式部大丞であつ

たためである。母は式部が三、四歳のころ亡くなった。為時は再婚したが、その妻の家に通い、自宅では式部と、その上の姉と、下の弟との三人の子供を育てた。為時はまた漢学者であつて、詩文をよくし、その方面で一家をなしていた。式部が漢学に通じているのは、その父の影響である。また父のことに関連して、式部の経歴の知られる面もある。

生年については、(1)天禄元年(九七〇)に生まれたとする説が最も早くて、(2)天延元年(九七三)、(3)天延三年(九七五)、(4)天元元年(九七八)などの説がある。紫式部日記によると、大いに年をとっているようにもいうが、また道長がいい寄ったともいうから、あまり年をとっていたとも思われない。そんなことを手懸りとして、年齢を推定するのである。以上の四説のうち、(1)は今井源衛氏の著『紫式部』(昭和四十一年)の説であるが、これが比較的良好だと思う。日記の寛弘六年(一〇〇九)の記事では、今は年もよいほどになったから出家したい、これ以上年をとつて老いぼれては、仏前の勤めも出来にくくなるだろうという。これによると、このころもうかなり年をとっている。(1)の説では、このころ四十歳である。(4)の説では三十二歳であるから、これはよくない。(1)も推定で、比較的良好というだけであるから、(2)を次善とするのが、よいであろう。(1)によると、結婚が二十九歳、出仕が三十七歳、道長がいい寄ったのが四十歳、死んだのが四十八歳頃となる。(2)はすべてがこれから三年後、(3)は五年後、(4)は八年後となる。ただ(1)では道長(四十六歳)がいい寄るには、年をとりすぎていると思われるが、道長は式部が名高い源氏物語の作者であるため、戯れにいい寄っただけであると思う。そうでなければ、秘密にすべき